

山路慎一選手へ。

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオビニオンを直球で発信し世相を斬る「オレの話を聞け!」。

第17回は、先日若くして逝去された山路慎一選手に寄せて。あの富士での大事故で太田哲也を救助し、高潔な人格で誰からも愛された山路慎一選手との「縁」を太田哲也が語る。

TEXT●太田哲也 (Tetsuya Ota)
PHOTO●ATO / 服部真哉 (Shinya Hattori)

オレの話を聞け!

太田哲也の

リスペクトすること

一枚の写真がある。オレの右隣で拳を突き出して笑っているのがレーシングドライバー山路慎一選手だ。2012年12月、本誌とコラボしたドライビングレッスンのときに撮影されたもの。ゲスト講師として来てくれた。



ドライビングレッスンに講師として招かれた山路慎一選手(前列右から2人目)。FSWの競技長も務め、モータースポーツのあり方を参加者に伝えてくれた。

スクールで掲げる、Injury Free ZERRO。というテーマがある。

「当スクールに参加する受講生・関係者について、一般道における死亡・負傷事故をゼロとすることを目標とする」というものだ。これについて参加者に山路選手なりの考えを話してほしいとお願いしたら、瞬時に次のような「山路節」を披露してくれた。

「サーキットを全開で走るとき、まわりのライバルに勝ちたいという気持ちには必要だけれど、同時に共に走る者同士、リスペクトしなければならぬ。お互いリスペクトしあえば接触や事故は起きない」

——とくに印象的だったのは次のくだりだ。

「これは一般道でも同じです。中にはモラルの欠けた運転をする人を見かけるけど、それを含めて交通社会をリスペクトする。そういう人も守ってあげる気持ちを持てば、自然と交通事故も減るはずですよ」

傍らで聞いていたオレは衝撃と言え程の感動を覚えた。同時に同業者として誇りに感じた。そのとき14



年前の暴風雨の富士スピードウェイの出来事を思い出している……。

レーシングドライバー山路慎一

山路慎一、日本のレーシングドライバー。1994年より全日本GT選手権に出場。オレとはGT選手権がスタートしたときから3シリーズほど競争相手として戦ったのだが、あまり接点はなかった。GT選手権に参戦するまでは、オレはフォーミュラやプロトタイプを主戦場とし、彼は主にツーリングカーレースに出

場していたからだ。特に親しい付き合いもなく、畑違いの選手がGTレースで出会っただけの関係だった。

大きな接点は1998年5月3日に訪れる。暴風雨の富士スピードウェイGT選手権第2戦、クラッシュして炎上したフェラーリのドライバー山路慎一選手が救助した。

想像してみてもほしい。激しい雨と濃霧で視界不良の中、100km/hを超える速度で走っている。突然視界が開いたら燃え盛るクルマが視界の片隅に入る。そのとき一瞬の判断で急ブレーキして停車しようと思えるだろうか? おそらく1、2秒の

判断の迷いで通り過ぎてしまうのではないか。

燃え盛るマシンの傍らに停車する。ハーネスをはずしてマシンから飛び降りる。コース脇に消火器を取りに行き、炎に近づいて消火剤を噴霧する。できるだろうか?

しかもその事故車両が、ひと月ほど前に、自分を鈴鹿のS字ではじき出したフェラーリとそのドライバーだとしたら。それでも危険を顧みず車中から引きずり出してまで救助活動を続けるだろうか。そこからは救助員に任せてしまうのではないか。もうお気づきだと思いが彼に救助さ



98年のFSW、GT選手権第2戦。あの大事故で炎上する車内に取り残された太田哲也を救ったのが山路選手だ。危険を顧みず誰よりも早く駆け寄り、単身救助にあたった山路選手。そのスポーツマンシップは語り継がれている。

れたのは太田哲也、オレ自身だ。

畏敬の念

ずっと彼がどうしてオレを助けることができたのか疑問に思っていた。かなり難しい状況で、しかも助ける義理だってなかったのに。

事故後、オレは3年間の療養生活を送り、社会復帰後は精力的に仕事をしてきた。仕事に絡めつつも社会貢献活動もできるだけ行ってきたつもりだ。と言ってもオレがイイ人だからではない。元々は「自分が一番」と考えるような絵に描いたようなレーサー気質、つまり我仮な



1964年に千葉県で生まれ、88年にレースデビュー。90年には富士スプレッシュマンレースでクラス優勝を果たすなど、常にレースシーンの第一線を戦う。最後のレース、2012年のボルシェカレラカップ第10戦でも2位入賞と好成績を収めた。誰もが復帰を待ち望んでいたが、残念ながら叶わなかった。

性格だった。でも与えられた命に対して、今度は他者に与える「義務」を果たさなければならぬ。感謝してもしきれないほどの恩を多くの人が受けた。特に山路選手はいつしかオレの中で畏敬の存在となった。

だから2012年、スクールの事務局から山路選手を呼びませんか？と言われたとき、「果たして会ってもらえるのだろうか？」。そんな昔の初恋の人に会うような不思議にどきどきした感情でいっぱいになった。

しかし再会した彼はとても気さくで、全てを許容してくれている感じだった。そして冒頭の「周囲をリスベクトする」の山路節につながる。どんな人も守ってあげる気持ちがあったから、あの事故でオレのことも躊躇なく助けられたのだろう。



アイデンティティとして

2014年5月26日、山路選手が永眠した。命の恩人というだけでなくオレのアイデンティティだった。その事実を受け入れられず強烈な失意とともに一週間を過ごし、通夜に出席した。奥様とお子さんにお会いした。山路選手が体調を崩したのは十数年前、奥様が知り合ったのもその頃で、その後結婚、10年間程連れ添ったようだ。2012年にゲスト講師として来てくれた頃は、新薬の効果で体調がいくぶんよくなっていたらしい。とても元気に見えたので全快したのだと思っていたが、そうではなかったようだ。奥様によれば「弱音を吐くことができない人なのです。いつも人前では元気そうにしている」。そして付け加えてくれた。

「山路も太田さんと会えたことを喜んでいました。もうそれで眠すかしにくらい泣いてしまった。奥様も立派で優しい人だった。奥様と息子さんに会って、お礼と無沙汰の謝罪を伝えられてよかった。

「山路も太田さんと会えたことを喜んでいました。もうそれで眠すかしにくらい泣いてしまった。奥様も立派で優しい人だった。奥様と息子さんに会って、お礼と無沙汰の謝罪を伝えられてよかった。

幸せですか？

通夜は盛大で、参列者には泣いている人も多く、彼の人格を改めて感じさせられるものだった。目を閉じた山路選手の顔を見て、悲しいけれど、現実を受け入れなければならぬと考えた。

通夜から二週間後、自宅に妻と娘とで伺ってもう一度山路選手に会ってきた。山路選手の奥様からまたお話を聞いた。

「山路は事故の後、太田さんのことを気にしている。『オレは本当に太田さんを助けてしまったよかったのかな？ 幸せなのかな』と言っていた時期がありました。それを聞いてオレは「あっ！」と

思わず声を上げてしまった。

「一年間は、先が見えないで『こんな身体になってしまった、事故のときに華々しく死んだ方がよかった』と自暴自棄になっていた時期があったからだ。その気持ちが山路選手に伝わっていたのだろうか。

山路選手を含めて助けてもらった関係者や医師たちに対してもちろん道義的な感謝の気持ちは抱いていたが、心底、心の奥底から本当に感謝の気持ちが湧いてきたのは、事故から一年後、前を向いて歩き出し、周りが見えてきてからだ。

そして山路選手の奥様から聞かれた。「今、幸せですか？」

妻が答えた。「幸せです。ありがとうございます。よかった、山路も喜ぶと思います」と言っていて、奥様は目頭をおさえた。彼が生きているうちにもっとはつきり自分が生きていることを「おかげさまで幸福だよ」と伝えておくべきだったかもしれない。申し訳ない気持ちだ。

富士が見えてくると感謝の気持ちがいってくる

畜場の出口には彼のブログ「山路慎一の説教部屋」から引用された言葉が貼ってあった。どれも熱く、優しさに満ち満ちた心情がストレートに語られていた。その中でももっともオレが気に入ったのはこの一節だ。「富士スピードウェイを走行した事のある人は、ご存知だと思いますが、100Rから（見える）の富士山が、とっても綺麗です。（中略）。走行中によそ見をする事をすすめているのではなく、走っている時は、沢山の情報収集をしなければなりません。瞬間の出来事ですが、その光景は最高です」



「サーキット走行は、タイムを削るだけの場所では、ありません。運転を覚える、正しい運転を身につける場所です。

それが出来ると、綺麗な富士山が見えてくるのです。

正しい運転が出来るといふなら、いと、いつまでも見えないものが、沢山あるのです。だから、感謝の気持ちが日々強くなるのです。

オレだけの特別な場所、風景をこれからも刻んでいきます。皆さんも一緒にたくさんの「特別」な景色を、焼き付けてください」

広い視野と周囲へのリスベクトの気持ち、愛情と言いつてもいいかもしれない。こうした視野の広さを持つ人物だからこそ、あの切迫した状況で消火活動ができたのだと確信した。

これからのオレの役目は、もっともっと山路選手が伝えたくても伝え切れなかった「魂」を多くの人に伝えていくことだろう。

周りを見渡せるようになると、感謝の気持ちが広がって美しい光景が見えてくる。ずっと心に留めていきたい。